

上なしの格好で本当に惨めな姿でした。

俗に「乞食部隊」とも言われた部隊です。帰還兵のたまり場では、人を裸にDDTを頭からかぶらされ驚いたものです。

ここにいて三日目に、天皇陛下の謁見があるから、全員表に出るように上官から言われました。表に一緒に並び、玉顔をしみじみと拝みました。

三月十六日、軍人を解かれ「召集解除」全員の復員を命ぜられ、それぞれ自分の故郷に帰宅しました。私が帰宅した時の母親の驚いた顔と姿は生涯忘れられることはありません。

そして昭和二十一年三月より早速、高崎鉄道管理局車両課客貨物係に復職しました。そして昭和二十七年三月、依願退職し、兄の経営する玩具問屋高塚屋に勤務し、三年後の倒産まで頑張りました。

## 海軍占守島警備隊

石川県 町 長 富

私は大正十（一九二一）年十月十五日、鹿児島県大島郡与論村大字奈間に生まれました。家業は米作と砂糖きび栽培でした。

地元の小学校高等科を卒業すると大阪の海員養成所に入り、一年間教育を受け、卒業後に大阪商船に入社、昭和十七（一九四二）年七月まで外洋航海で世界を二周するなど、船員として勤務しました。

兵役は、志願して昭和十七年九月一日に佐世保海兵団（兵籍左志機三六七六四）に入団しましたが、海軍に入る前から商船の先輩が元海軍軍人であったことから事前に海軍のこと、軍隊生活のことなど、種々と教示を受けることができました。入団者の名前が張り出されたとき、名前の上に赤丸が印されており、それは入団前に船員であった

者たちでした。

入団して、初年兵教育は多くの辛い思いもしましたが、思い出すのは、甲板掃除の際に「チェック」とある初年兵が言ったために、全員が徹底的に教範長から痛めつけられたことでした。

ようやく三カ月の教育期間を終えて四等機関兵から十一月に二等機関兵となり、佐世保海軍自動車学校に入りました。入校三カ月で自動車免許を取得しました。どうも私には機関兵を嫌う気持がありました。

この免許取得には八十人中四十人の中に入り、さらに四十人中の二十人の中にも入りました。そして自分なりに八番線の針金で工夫して自動車運転の猛練習をした事も忘れられません。

海軍自動車学校は佐世保の練兵場の中にあり、その教育隊での教育は、起居をはじめ、しつけない、すべてに厳しく、階段の登り降りでも「遅い、遅い」と二十人全員がバツタをもらいました。遠出で佐賀県や福岡県へ行きましたが、帰還が遅い

と二十人全員が並ばされ、またまたバツタの嵐を受けます。

その後ベトナム行きとなり、日本本土に米や荷物を送り出す作業に就きましたが、その際も現地でフランスの自動車を使い一層運転練習に励みました。

昭和十八年五月、第二十六防空隊付きを命ぜられ、横須賀を出て、六月には任地の幌筵にゆき、北千島海軍航空隊武蔵基地警備付きとなり、昭和十八年八月、第五十一警備隊付きを命ぜられました。

同年十一月、上等機関兵となり、昭和十九年二月には占守島警備のまま第五十二警備隊付きとなり、翌昭和二十年五月に機関兵長となりました。

その間、昭和十九年の中ごろになりますと、米軍のB27爆撃機やグラマン戦闘機等が来襲、爆撃や機銃掃射が頻繁に行われるようになり、終戦間際には艦砲射撃まで加わり、飛行場は大火災となり、兵器も破壊され、戦死者も多く出る始末とな

りました。

このようなある日、私も小隊長より決死隊の命を受けました。それはその当日、内地より弾薬輸送があり、それを陸揚げする任務でした。とくに陸揚げした弾薬等の集積場に艦砲射撃の火が着火、燃え出したのを消火せよとの命令でした。激しく燃え上がる火は手の付けようありません。私は「町、行きます」と壕の中から外へはい出ますと、いきなり照明弾が、同時に砲弾も周辺に飛んできます。

とつさに死を悟った時、瞬間的に、海の上を歩いている母親の後ろ姿が見えたのです（その当時、母親は健在でありました）。

目の前で砲弾は次々に爆発しており、ようやく集荷場所に潜り込むようにたどり着き、二回ほど、持ってきたバケツの水で火を消し止めました。後ろで私の姿を見ていた小隊長や戦友たちは「よく命があったものだ」と喜んでくれました。消火用の水のある場所は、私が昼間見回りのときに確認

しておき、また当日の検査では信管に火がつく寸前であったようです。

こうして大爆発を免れたことが、小隊長より上申され、その結果、北方方面司令官より感謝状を頂くことになりました。その感謝状は千人針と共に大切に持っておりましたが、これは後でシベリア抑留のときに大変なことになる一因でした。

昭和二十年八月十五日、作業をしていますと全員集合の命令が掛かり「天皇陛下より終戦が告げられた」とのことで、一同落胆して大泣きとなりました。

千島占守島では柏原に陸軍部隊が警備しており、海軍は武蔵基地の飛行場の警備を担当しておりましたが、昭和十九年後半から海軍は本土防衛のため引き揚げを始めていました。

私たちは第二回目の引き揚げのため待機して船待ちの折も折、ソ連が参戦し、ソ連兵が武装解除に上陸して来ました。海軍百人、陸軍四百人が一カ所に集合させられ、航空隊の兵舎を中心にして

二百メートル四方に網の囲いを張り、櫓を組み立て、番兵が四方を固めて行動が拘束されました。

そして身の回りに武器が無いか調べられ、鉛筆削りさえも「ヤポンスキー、サムライ、ハラキリ」と笑いながら持ち去りましたので、その後、皆は大切なものは隠すようになりました。

そこで約二カ月、弾薬その他武器の撤収作業に当りました。作業では早く終えた小隊から先に日本に帰すとの事で、皆早く帰りたい一心で懸命に働きました。やがて作業も終わりソ連船が迎えに来ました。その船は重油運搬船でタンクの横に陸海軍五百人を乗せ出港、何時間かして北海道が見えて皆喜んだのも束の間、船倉へと追いやられました。三日ほど船はウロウロしてシベリアのある港につきました。岸壁では日本兵が多数働いており、その瞬間からシベリアの苦勞の始まりとなりました。

ソ連沿海州の第四十八収容所に五百人が収容されたのですが、その収容所に行く途中、ノモンハ

ン事件当時の日本兵とすれ違いました。ロシア兵の番兵が厳しく監視する中、すきを見て話を交わしました。彼らは自分たちに「日本には帰れない」と語っていました。彼らの部隊名や出身地、氏名などは話せないとのこと。後味の悪い思いでした。そのときは夕暮れ時で、顔などもはっきり分かりませんでした。その元日本兵たちは国境警察官か憲兵等だったかのような話でした。

収容所では日本兵の隊長は高橋陸軍少尉、小隊長は真鍋海軍二等兵曹でした。ここでは全員が身体検査、持物検査を受け、私も先に話した感謝状、運転免許証、千人針などを取り上げられました。

この感謝状を見て「町は戦死に値する」と、担当であるソ連のゲーペーウーが高橋隊長に告げますと、高橋隊長は即座に感謝状を破り捨てました。お陰で戦犯を逃れることができました。日本兵で大地主であった者や元憲兵、警察官等は発見の都度、奥地へ連行されて行きました。

昭和二十年の冬は何十年ぶりの厳冬で、鉄路

の補修作業では零下五二度の寒さを味わう等大変な目に遭いました。聞くところによりますとロシア憲法では零下五〇度以下がりますと、温度が上昇するまで作業は休みとなります。

また作業に出るときは警戒兵二人、民間人二人が一個小隊についていました。零下五〇度になりますと警戒兵は作業を中止させ収容所に戻りました。帰途四列になって鶴嘴を担ぎながら帰るとき、互いの顔を見て白くなった顔や鼻を見て「コレ」と互いに励まし凍傷を防ぎ、収容所に帰る毎日でした。

食事もノルマにより支給されますが、作業場では線路の横に火を炊き、暖を取りながら朝と夕の一日二食のスープと黒パンの惨めな食事を取ります。空腹のため松の葉はよく食べました。

夏の暑い時には四〇度にもなり、夏と冬の温度差は驚くほどの差があり誠にひどい所でした。木の伐採も夏場は割合にノルマ達成は楽で、食事の量も増えました。その食事が済むと、毎晩、八時

から二時間ほど共産主義の教育があり、これには参りました。共産主義を早く理解した者と作業の能率の良い者から帰国できるとの事で競争心をあおり、働かされました。

このころから強制労働と寒さと飢えで入院者が次第に多くなり、高橋部隊は解散となり、ハバロフスクの収容所に移りました。ここでの作業は同じようなものでしたが何か月かしたところで、ようやく日本に帰る事となりました。

昭和二十三年六月二十日ごろ、ナホトカに集結、「信洋丸」に乗船して、七月一日に舞鶴港に入港、上陸しましたが、私の身体は衰弱のため歩行も困難となり舞鶴病院に入院となりました。

シベリアでの強制労働は昭和二十年十月から同二十三年六月末まで三年近くになります。このような戦争と、これに伴った悲惨な抑留と労働生活の惨めな事は二度とあってはならないと思います。その後、舞鶴病院から石川県の山中海軍病院に転院し、二年後に退院となりました。

何年かして傷病恩給の申請に必要な現認者がなかなか見付けられずにおりましたが、厚生省第二課に依頼しましたところ、香川県に真鍋氏が健在と連絡があり、何年ぶりの再会を果たし、互いの健在を喜び合いました。復員して知り得たのは、海軍百人中、この二人だけで、他の方々の消息は現段階では全く不明であります。

### 主計兵として

#### 艦隊勤務と上海特別陸戦隊

石川県 島田 外治

大正十三（一九二四）年四月、石川県小松市新鍛冶町で、五人兄弟の次男として生まれる。長男は戦死した。

昭和十七（一九四二）年五月、海軍を志願、舞鶴海兵団に入団した。兵科は主計科で衣糧術を担当したが、この衣糧術では食事の調理、被服その他物品の管理、供給を習得させられた。石川県海交会会長の武部敏克氏と同期で彼は機関科であった。

舞鶴海兵団のいわゆる初年兵教育が終了して、同年八月一日、夜行列車で呉に行き、軽巡洋艦「長良」に乗艦した。

「長良」の歴史は古く、佐世保海軍工廠での起工は大正九年、進水は同十年。昭和九年ごろに改